

動詞の最小周期と最大周期

呉 凌非
滋賀県立大学

1 はじめに

動詞については、さまざまな視点から捉えることができる。例えば、Lakoff (1966)は統語関係から動詞の分類を行っている。Fillmore (1968, 1971)はセマンティックロールによって動詞の分類が可能だと考えている。Chafe (1970)と Cook (1973)は動詞に関するさまざまな要素をマトリックスの形でまとめ動詞を分類している。Comrie (1976)は「局面」の視点から、金田一 (1976)は動詞の相を語用論的視点から捉えている。また、Schank (1973, 1985)、Jackendoff (1983) は基本動詞を定義し動詞を基本動詞に分解するという捉え方も見られる。本発表は上記の諸研究をベースに動詞を周期の視点から捉えるものである。

2 周期と動詞

Schank は動詞が記述する事象が複数の基本動作から構成されるというように捉えている。ここでは、動詞が記述する事象には具体的にどのような基本動作が含まれているかを問題にせず、一連の基本動作の存在を認め、そしてその一連の基本動作が事象の各局面を構成すると理解する。この考えを踏まえて、次に周期と動詞との関係について見てみる。

まず周期については、同一の事象が一定時間ごとに繰り返して現れる特性のことだと考える。動詞の中にはある種の動詞は対象の恒常的特性を記述し、事象的には、いくら時間が経っても、図1で示しているように局面的変化、すなわち一定時間ごとの同一局面の繰り返しは見られない。つまり、この種の動詞の記述する事象には周期性が見られず、ここではこのような動詞をゼロ周期動詞と名づける。この種の動詞としては、日本語の場合、「ある、似る、優れる、…」など、中国語の場合、「有、是、属于、…」など、英語では、「be、have、know、…」などが挙げられる。ゼロ周期動詞は時間副詞と共に起るときにその時間帯の状態の継続を表すことになる。当然のことながら、ゼロ周期動詞の場合は最小周期もなければ、最大周期もない。

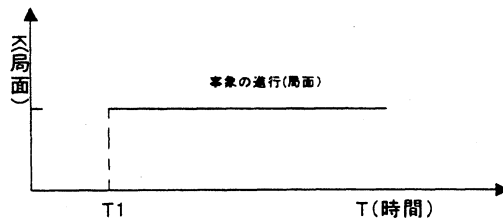


図1 ゼロ周期動詞

一方、図2に示しているように、ある種の動詞が記述する事象の全過程には局面が繰り返さず、ある時点になると、事象が終結し、ある種の状態に入る。このような事象全体の中に一つの周期しか含まない現象を記述する動詞をここでは、単周期動詞と呼ぶ。単周期動詞が記述する事象には一つの周期しか含まれていないため、「一撃」、「一押し」などのような複数回数から区別するように用いる「一」という頻度を表す数量詞との共起はほとんど見られない。このような動詞としては、日本語では「壊れる、割れる、付く、…」など、中国語では、「破、亮、成、…」など、英語では、「reach、achieve、finish…」などが挙げられる。

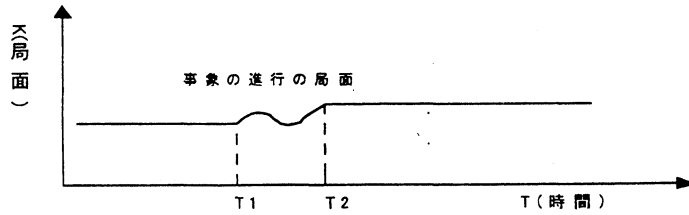


図2 単周期動詞

ゼロ周期動詞と単周期動詞以外の場合、動詞が記述する事象には、時間の推移とともに、さまざまな異なる局面が連続的に現れてくる現象が見られる。それらの局面は Schank の基本動作で構成されているとすれば、動詞を成立させる最小限の一組の基本動作が必ず存在しているはずである。この最小限の一組の基本動作によって構成される周期をここでは最小周期と呼ぶ。図で言えば、図3の T1 と Tm の間の周期となる。動作が時点 Tm を過ぎても続いている場合、局面は最小周期の繰り返しだと考える。即ち、 $[Tm, Tq]$ は $[T1, Tm]$ の繰り返しとなる。具体的に言えば、例えば、「一画を書く」を「書く」の最小周期だとする場合、「字を書く」は複数の「一画を書く」という最小周期の繰り返しになる。また、「一字を書く」を「書く」の最小周期と定義すれば、「手紙を書く」は「一字を書く」という最小周期の繰り返しとなる。逆に時間的に Tm に達していない場合、即ち最小周期が完成されていない場合、動作も完成しておらず、動詞が表す本来の意味が成立しなくなる。すなわち事象を構成する最小限に必要な一組の基本動作のどれかが欠けていることになる。例えば、「叩く」という動詞に一連の動作が含まれていると考えられる。しかし、対象に動作が及ぼす前に中止したら、「叩いた」にはならない。このような時間の推移とともに局面が最小周期の繰り返しとなる事象を記述する動詞を、ここでは多周期動詞と呼ぶ。

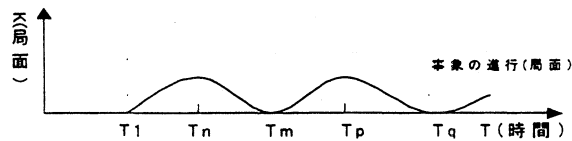


図3 多周期動詞

このように、アスペクトの視点から動詞はゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞の三種類に分けることができると思う。

3 最小周期と最大周期とその応用

最小周期については、動詞を成立させるために、最小限に必要とする一組の基本動作（局面）によって構成される周期のことと考える。この定義からは、最小周期は動詞に内在するものであるため、語彙レベルの内容になる。一方、最大周期については、命題を成立させるために、最小限に必要とする一組の最小周期によって構成される周期のことと考える。例えば、「トンネルを掘る」という命題を成立させるために、最小限一つのトンネルが完成されていなければならない。最大周期は命題に関連するものであるため、語用論レベルの内容であると考えられる。最小周期と最大周期の応用例として、今回は中国語の「動詞の重畳」について考えてみる。

動詞の重畳とは、現代中国語において動詞 V が次例のように「VV」あるいは「V-V」の形を取ることを言う。

(1) 我看看报纸。(VV)

(私は新聞を読んでみる)

(2) 我看一看报纸。(V-V)

(私は新聞を読んでみる)

動詞の重畳については、これまではさまざまな研究が行われてきた(陸 鏡光 2000、叶歩青 2000)。しかし、つぎの3つの点に関しては、ほとんど触れていなかった。

I 動詞分類的にどのような類の動詞が重畳の形を取ることができるのか。

II 日本学校文法では、中国語の「V」と「V-V」は互いに置き換えることができるとされているが(山添秀子(2000)、それは何を意味しているのか。

III 動詞の重畳の文法的意味機能について、叶歩青(2000)は主に(1)「少量」(2)「賞試(試し)」(3)「委婉(婉曲)」とまとめているが、その理由とは何か。

ここでは、上記の3つの点について動詞の周期の角度から検討してみることにする。

基本的には、動詞の重畳が動作の繰り返しを表す点においては、異論はないようである。本発表の動詞の分類から考えれば、ゼロ周期動詞と単周期動詞はいずれも繰り返しの特徴が見られないため、理論的にはそれらの動詞は重畳の形を取ることができないはずである。実際、ゼロ周期動詞の重畳「是是、有有、属于属于、、、」、単周期動詞の重畳「破破、亮亮、到到、、、」などはいずれも成立しない。したがって、動詞の重畳は多周期動詞のみに見られる現象であると言える。

「VV」と「V-V」は、語構成的には、「打倒(打ち倒す)、喝干(飲み干す)」と同様、複合動詞の部類に入る。文法機能的には、後の動詞が前の動詞の意味を補うあるいは限定するという働きを持っている。「VV」と「V-V」に関して言えば、後の「V」あるいは「-V」は前の「V」の意味を限定していることになる。したがって、「V-V」については「V」の行為が一回発生すると理解することができる。つまり、「-V」は「一撃」と同様、動詞が記述する事象のなかの一つの最小周期を表しているとも理解できる。「-V」と「V」の同等性については、現代中国語では、次例のように数量詞が「一」である場合、省略されることが多い。

(3) 给我一张地图。

(一枚の地図をください)

(4) 给我张地图。

(一枚の地図をください)

同様に、「V-V」の「-」が省略されれば、「VV」の形にかわる。すなわち、「VV」は「V-V」の変形であると理解することができる。文法機能的にも、「VV」と「V-V」と同様、動作が一回発生するという意味を持っている。というわけで、ほとんどの場合、「V-V」と「VV」は互いに置き換えることができる。語用的には、山添秀子(2000)の指摘したような意味上の差異は見られるが、「V」のあとの「V」あるいは「-V」がいずれも動作が一回発生するという意味を表している点においては、違いはないと言える。

これまでの議論をまとめて、動詞の重畳という言語現象は多周期動詞にのみ現れ、行為が一つの周期が過ぎた時点で一つの区切りとするという働きをもっている、と考えることができる。この考えを踏まえて、動詞の重畳は文法機能的になぜ(1)「少量」(2)「賞試(試し)」(3)「委婉(婉曲)」などの意味を表すことができるのかについてもう少し具体的に見てみることにする。次の例のように、「看看」は少量の動作を表すことができる。

(5) 让我看看，就看一眼。

(ちょっと見せて、ひとめでいいから。)

そもそも動詞の重畳は動詞「V」が一周期を表す「-V」によって限定されているため、語用的に「少量」を表すことができることは当然であるように思う。また、次の例のように、動詞の重畳は「試し」を表すことができるとされている。

(6) 你吃吃，味道怎么样？

(食べてみて、味はどう？)

上で述べたように、動詞の重畳は「少量」を表すことができるが、強いて言えば、この「少量」はつまり「少し

～する」あるいは「ちょっと～する」という文型にも通じる。このように、語用のレベルでは、動詞の重畳が「試し」を表すことができてもおかしいことはない。

また、

(7) 我想说说我的看法。

(私は自分の考えを述べてみたい。)

(8) 你去看看他。

(彼の様子をちょっと見てきて。)

の例のように、懇願や催促を表すときに、動詞の重畳を用いることがある。そのような使い方は一般的に「婉曲」の効果があるとされている。これについても次のように解釈することができる。懇願や催促の表現を用いる際、自分にさせてもらう行為あるいは相手にしてもらう行為を最小限に（一周期）限定することにより、押し付けの印象を避けることができる。ちなみに、上記の「少量」、「試し」、「婉曲」などの表現は日本語に直すときに、いずれも「ちょっと」と訳すことができる。つまり行為を最小限に限定するという点において共通しているということが言える。

最大周期については、「一通り」のような副詞、「食べ尽くす」のような複合動詞などが考察の対象になると思われる。

4 おわりに

本発表では周期という概念を導入し動詞の分類を試みた。従来の状態動詞、瞬間動詞、動態動詞の分類と比べて、整合性があり、特に瞬間動詞について判断の主観性を避けることができる。最小周期については、「動詞の重畳」のほかにも応用が見られる。最大周期については、主に数量副詞、頻度副詞などを中心に考察していきたい。

5 参考文献

- Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. The University of Chicago Press.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge University press.
- Cook, W. A. 1972. *A set of postulates for case grammar analysis*. Languages and linguistics: Working Papers No. 4. Washington, D. C. Georgetown University.
- Cook, W.A. 1973. *Covert case roles*. Languages and linguistics: Working Papers No. 7. Washington, D. C. Georgetown University.
- Fillmore, C. J. 1968. *The Case for Case*. Universals in Linguistic Theory. New York. Holt, Rinehart and Winston, Inc. 田中春美訳. 1975. 『格文法の原理』三省堂
- Fillmore, C.J. 1971. *Some Problems for Case Grammar*. Monograph Series on Languages and Linguistics. Georgetown University.
- Lakoff, G. 1966. *Stative adjectives and verbs in English*. Mathematical Linguistics and Automatic Translation. Report No. NSF-17.
- Schank, R. C. 1973. *Identification of Conceptualization Underlying Natural Language*. Computer Models of Thought and Language. 187-247. San Francisco: W.H. Freeman and Company.
- Schank, R.C. 1985. 『考えるコンピュータ』石崎俊訳 ダイヤモンド社
- 金田一春彦 1976. 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 陸鏡光 2000 「重畳・指大・指小」《漢語学報》第一期 pp21-27
- 山添秀子 2000 「単音節動詞重畳的語用分析」《漢語学報》第一期 pp70-79
- 叶步青 2000 「漢語動詞重畳的語意研究」《漢語学報》第一期 pp48-52